

# グラタン

後藤 靖子

「靖子が作ったグラタンが食いたいなあ…」

「じゃあ今度帰ってきた時に、内緒で作ってあげるよ。」

部屋のベッドに横たわったまま、父は笑って私を見送ってくれました。

この会話が父と私の最後の会話になりました。

3月下旬、私は父の様子を見るために実家のある岩手に帰省しました。結婚後も仕事を続けていたため中々実家に帰る時間を作れずにおりましたが、久々に実家に帰ると、父は思ったより顔色も良く、相変わらずよく笑っていました。

「お前も、もうすぐ30歳のおばさんだなあ…」

と辛口な冗談で私をからかい笑う父でしたが、以前と比べ頬や手足が痩せて、一回り小柄になった印象を受けました。

洋食の料理人で、料理を作ることも食べることも大好きだった父。昔は体格も良く、かなりガツチリしていました。しかし、父が59歳の時、脳梗塞で倒れ入院。糖尿病の持病もあり、退院後も食事制限をしておりました。以前のように食べたい物を食べられず、左手に残っている麻痺のた

めに家で料理することもなくなり、父は昔に比べてどんどん元気が無くなっていった感じでした。それでも久々に私が帰ると、

「実家に帰った時ぐらいゆつくりしていけ。」と以前のように明るく迎えてくれました。

私が学生だった頃、父とよくケンカをしました。自分の気持ちを理解してもらえない悔しさで大泣きしたこともありました。父とケンカするたびに、早く独立してこんな家を出て行ってやる！と思っていたのですが、実際に社会に出てみると厳しい現実に泣くこともしばしば：気分転換しようとして週末に実家に帰るたびに父は、

「俺の顔が見たくなつたのか？」と笑いながら出迎えてくれました。

「別にお父さんの顔が見たくて帰って来たんじゃないよ。」

といつも言い返すのですが、あまり聞いていない様子で、

「どうせ仕事で自炊もろくにしてないだろう？グラタンでもハンバーグでもお前が好きなの作ってやるから食っていけ。」

と、荷物も整理してないうちに私を台所まで連れて行って、得意の手料理をごちそうしてくれました。お腹がいっぱいになる頃には、会社であった嫌な事や、辛い毎日のことはすっかり忘れていたのです。

私は特に父の作るグラタンが大好きでした。

私も料理の本を見て作ってみたいのですが、なかなか父の作るような味にならず、隠し味に何を使っているんだろうといつも不思議に思っていました。

「お父さん、グラタンの作り方教えてよ。」

たまには父から料理を聞いてみよう…そう思って私が父に尋ねると

「お前に出来るかなあ？」

と父は笑いながら小麦粉とバターを出してきました。父が料理を教えてくれる時はいつも口うるさいので、学生の頃はすぐにケンカになり、途中で私が外へ出かけてしまうこともしばしばありました。

今思うと自分の幼さに笑ってしまうのですが…。

父はグラタンを作りながら

「お前のじいちゃんは腕の良い料理人でな、俺にも料理を教えてくれようとするんだけど口うるさくて、何回もケンカになったよ。じいちゃんが死んでから、あの時我慢して聞いてればよかったって後悔したもんだなあ。」

と懐かしそうに私に話しました。

「ふうん。口うるさいのはおじいちゃん譲りなんだね。」

と私も笑いました。

出来上がったグラタンは、いつもの父の味でした。

「お父さんの病気はどうなの？」

その夜、母から父の病状についての話を詳しく聞きました

「うーん。週に2、3回病院に通って薬をもらったり検査したり。お父さん食事制限で人生の楽しみが半分減ったって…」

「お父さんらしいね。」

「結婚したんだし、あんたも仕事ばかりしてないで早くお父さんに孫の顔見せてあげなさいよ。」

「そのうちね…」

「今回はゆっくりしていけるの？」

「月曜に仕事があるから明日の新幹線で帰るよ。ごめんねバタバタしちゃって。」

「それじゃあまた今度の連休にでもゆっくり帰ってきなさい。」

「そうだね。」

私はうなずいて荷物を整理し始めました。

次の朝、小雨が降っていました。

「お父さん、そろそろ帰るね。」

父の部屋のふすまを開けると父はベッドに横になっていました。

「もう帰るのか？もっとゆっくりしていけばいいのに。」

父が少し起き上がって窓の外を見て言いました。

「雨が降ってるなあ…ごめんな駅まで送ってやれなくて。」

「大丈夫だよ、バスもあるし。お父さんも早く元気になってまた私にご馳走作ってちょうだいね。」  
父は微笑んでうなずきました。

「お父さん、今度の連休にまた帰ってくるからね。お母さんには内緒で何か食べたいものある？」

「靖子を作ったグラタンが食いたいなあ…」

「じゃあ今度帰ってきた時に、内緒で作ってあげるよ。」

4月に入り何日かが過ぎました。

その日は母からの電話で目を覚ましました。

「お父さん、肺がんの末期って…先生が。」

それは予想もしていなかった母の言葉でした。

私はあまりに突然の出来事だったので、一瞬母が何を言っているのかわかりませんでした。母の声も震えていました。

「2、3日前からお父さん咳き込んで、あまりにひどかったから昨日病院に連れて行ったの。検査してもらったら肺に影があるって…。」

お父さん明け方ぐらいいから意識がはっきりしてなくて……。」

「お父さん、死んじゃうの？」

私は心臓がドキドキして立っていられませんでした。

「先生は、長くて1週間って。」

「そんなに悪いの？先週帰ったときは元気そうだったのに。」

電話を置くと、頭の中が真っ白になりました。

荷物をまとめて実家へ帰る準備をしましたが、バッグの中に何を入れたのかほとんど覚えていませんでした。

病院に着くと、父は朦朧とした状態で母の手をつかんでいました。

「お父さん、靖子だよ。」

母が父に話しかけていましたが、うなずくのがやつのようでした。父の体にたくさんの機械が繋がれていて、状態があまりよくないことがわかりました。

夜になると父の呼吸の回数がどんどん少なくなっていく明け方、ついに父は息を引取りました。私にとって、強くて大きな存在の父の死でした。

「本当に寂しくなるのはお葬式が終わって家が静かになってからだね。」

「本当だね。現実に引き戻された感じがする。」

母と私は父の葬儀が終わり父の部屋の整理をしていました。

思い出が多すぎて、片付けながら私も母もずっと泣いていました。私は父が大切なものをしてまつてある箱を何気なく開けると、社会に出たばかりの私が父宛に書いた手紙が出てきました。

「お父さんへ」

封筒の中の手紙の内容は、元気でやっているとか仕事も順調とか生活に慣れたとか、そんなことばかり。本当は毎日が辛くて帰りたいと思っていた頃なのに、自分の弱い所を見せたくなくて書いた意地っ張りな手紙。

この手紙を父はどんな気持ちで読んだのでしょうか。

こんな手紙でも、父の大切な箱に入っているなんてちょっと恥ずかしい気持ちでした。

父の初七日も終わり実家も一段落したので、私は元の生活に帰る事にしました。母一人で家に残して帰るのは少し心配でしたが、仕事を長く休むわけにもいかず、その日の夕方の新幹線に乗ることに決めました。

いつもなら父が駅まで車で送ってくれるのですが、もう父はいません。駅へ向かうバスの中で本当に父がいなくなってしまうことを実感しました。

父がいなくなるとわかっていたなら、あの日帰らずにグラタンを作つてあげれば良かった…孫の顔も見せてあげたかった。私に出来る親孝行を全部してあげたかった。

バスの中で気持ちが抑えられなくなり、私は帽子で顔を隠しながら泣いてしまいました。

あれから3年。今では私も一児の母となり、慌しい毎日を過ごしています。日に日に成長していく息子を見て、子供は宝物だと思ふ毎日です。

息子はこれから成長して、いろいろな壁にぶつかって悩んだりする時期が来るでしょう。そんな時、父が私にそうだったように、私も息子に対してまっすぐに接していきたいと思ふのです。家族だから時にはぶつかることもあるでしょう。でも怖がらずに正直に子供に接していきたいと思ふです。

まだまだ新米ママなので、毎日が失敗と反省の繰り返しですが、これから私も子供を通じて成長していきたいと思つています。

父の死を通して、うまくは言えないのですが親の愛情の深さと、家族の絆というものを感じました。

「靖子の作ったグラタンが食いたいなあ。」

主人が言いました。

私はちよつとだけ父を思い出しました。

そんな私の顔を見て息子が笑いました。